容にかたよりがあるものの，書いてみようという人が増え，会員数も回復してきた．

学会の経営を安定させるためには，会員数 400 名以上が必要と考え，さらなる会員の獲得に努めた．会員の復帰が進み，会費収入が増加する一方，「昆虫学評論」の方は原稿が比較的少なくて，これにかかる印刷費の負担が少なくなっていたこともあって，大倉氏の立て替え分も 2 年ほどで二百万円余り返却でき，残りはご遺族のご厚意で，学会へ寄付していただいた．これによって学会の経営状況も急速に改善することができた．

終期

林は当初「昆虫学評論」と「ねじればね」両方を編集したが，和文誌の編集は英文誌の編集より格段に手間のかかることが分かった．そこで編集助手や後継者を育成する必要を感じたので，「ねじればね」の方は主に伊藤建夫氏と保科英人氏に DTP を任せられるよう編集ノウハウをおぼえてもらい，谷角素彦氏には校正をお願いし，林は版下の最終調整のみ行うようにした．編集用機材，ソフトは，林は自前で調達し，伊藤氏，保科氏，芦田久氏（ソフトのみ），澤田義弘氏の分は学会が負担した．

1996 年の 74 号以降は，水野氏が原稿依頼や手配などを担当し，版下作成に林，伊藤，続いて保科の各氏が参画し，谷角，初宿の両氏は校正などの作業を支援した．15 年間にわたったこの編集態勢の下，記事の内容も記録的なものから，採集道具，テクニック，分子系統や分類群の解説などバラエティーに富んで充実したが，同時に先達の林匡夫，中根猛彦，北山昭，黒澤良彦，中條道夫，佐々治寛之，佐藤正孝，穂積俊文，木元新作（いずれも敬称略）等の訃報が掲載されており，時代の変遷を偲ばせる．

「昆虫学評論」の編集は，当初安藤清志氏が DTP を担当し，林が引き継いだ．その後，芦田久氏，澤田義弘氏にも参加してもらうようになった．

（林　靖彦）

「甲虫ニュース」追想

「甲虫ニュース」は創刊以来 42 年を経た 2010 年に終刊号が発行されて，以後既に 6 年が経過したことになる．今回，思いがけず「さやばねニューシリーズ」編集長から「甲虫ニュース」発行に関する思い出・苦労話の執筆を依頼された機会に，思いつくまま駄文を労することにした．なお，「甲虫ニュース」に関しては既に黒澤良彦（甲虫ニュース nos. 83/84），渡辺泰明（甲虫ニュース no.100）および新里達也（甲虫ニュース no.172）等の諸氏によって記述されているので，今回の追想がこれらの記述と重なる部分があることについてはご容赦願いたい．

「甲虫ニュース」の発刊

甲虫談話会の情報機関誌として「甲虫ニュース」の発刊が発議・会員に告知されたのは 1967 年である．この機関誌の掲載内容については，甲虫に関する啓蒙的記事および資料的価値のある短報を主体として，誰もが気安く接することのできる印刷物として年 4 回の発行が申し合わされた．そして，甲虫談話会には改まった役員は定めず「世話人」と称する人たちが会の運営に当たることにしたので，「甲虫ニュース」の発行に関する作業も編集担当世話人によって行われた．このような背景のもとに 1968 年に「甲虫ニュース」第 1 号が発行されたが，出来るだけ投稿原稿は掲載することを原則としたためノートの切れ端に書かれた原稿も編集担当世話人が印刷に廻せるようにリライトする必要があった．

「甲虫ニュース」の増頁と編集担当世話人の増員

このような対応がアマチュア等の人達に好感されたためか，「甲虫ニュース」は号を重ねるたびに短報等の投稿数が増加していった．このため発刊当初は 1 号当たり 4 頁建ての印刷物として出発したが，予想に反する事態に増頁の必要にせまられることになった．また，投稿された原稿の内容が，甲虫に関する生態や分布等に関する情報が多岐に亘っているため，短期間内にこれらの原稿内容を検討するには 3 名の編集担当世話人では困難となり会誌の年 4 回発行の規定に支障をきたすようになった．このため会員の中か

らは，会誌発行遅延の事態に「甲虫ニュース」の名に値しないと辛口の投書を頂く羽目になった．この様な事態を解消するために，1974 年からは編集担当世話人を 6 人に増員し，それまでの発行遅延を取り戻すための苦肉の策として 1973 年から続けられていた合併号を，1976 年からは正常の単一号に改めることが出来た．それと共に「甲虫ニュース」1 号当たりの頁数増加を図ることとして時には 14 頁に及ぶ号も発行し，今度は印刷費の増大が負担となった．

「甲虫ニュース」発行資金の調達

「甲虫ニュース」増頁に伴う印刷費増大の対応として，手始めに「甲虫ニュース」郵送のための封筒を東京農大専用の長形 3 号の封筒を使用することで経費の節減を図った．しかし，この封筒を使用する際には「甲虫ニュース」を三つ折りにしなければならず，「折角折り目の無い綺麗な雑誌が台無しになる！」との批判の手紙を受け取り，その後の作業は辛い思いで当たることとなった．甲虫談話会は 12 月の例会後には恒例の忘年会が行われるので，その席で有志から寄贈を受けた図書や雑誌等のオークションを行い，その売上金を談話会に寄贈して頂いた．さらに，昆虫関係の文献を専門に取り扱っていた前波鉄也氏経営の「TTS 昆虫図書」による「甲虫ニュース」のバックナンバー売り上げ金のご協力も頂いた．これらの結果，当初予期していた以上の収入増となったので，一部をかねてから懸案となっていた「日本産甲虫目録」の出版資金として活用することが出来た．

編集担当世話人の交代

しかしながら，その後の「甲虫ニュース」の発行は，世話人などの社会的活動の増大に伴い時間的余裕が制約されて，年 4 回の会誌発行がおぼつかない状態になった．このため，1982 年以降は編集担当世話人を笠原須磨生・岡島秀治の両会員にバトンタッチし，甲虫談話会と日本鞘翅目学会が合併する前年の 1988 年までこの両人によって「甲虫ニュース」の編集・発行が続けられた．

「甲虫ニュース」の終刊

日本鞘翅学会誕生後の「甲虫ニュース」の発行は，新たに制定された規約に基づいて 1989 年から 1991 年前半までは阿部光典・岡島秀治両会員が初代編集幹事として選任され，85 号から 94 号までの発行に当たった．その後，1991 年後半から 2000 年までは妹尾俊男会員が，2001 年から 2002 年まで妹尾俊男会員が編集委員長となって 5 名の編集委員が加わり，2003 年から 2010 年までは鈴木亙会員が編集委員長となり 4 名の編集委員に依って，「甲虫ニュース」の編集・発行が行われた．そして多くの会員に親しまれて愛され続けてきた「甲虫ニュース」は 2010 年に発行された 172 号が最終号となり新たな装いの「さやばねニューシリーズ」として引き継がれることとなった．

付言

この様に長年にわたって「甲虫ニュース」が途切れることなく連綿と発行を継続することが出来たのは，編集に携わった人達ばかりではなく全ての会員の協力によるものであることは言うまでもない．とりわけ，木村欣二会員からは「甲虫ニュース」の創刊号から最終号の 172 号までの長期にわたり終始軽妙酒脱なカットを提供して頂き会誌に花を添えて頂いた．また，柴田泰利会員は「甲虫談話会」発行分の「甲虫ニュース」No.1（1968）～ Nos.83/84（1988）に掲載された報文を，号別，著者別，項目別（形態，分類，生理・生態・生活史，分布・採集記録，文献紹介，雑報・訃報，会務報告，その他）の詳細な項目に分けた目録を作成して同好者の便に供された努力に対して心からの敬意を表す次第である．

（渡辺泰明）

「旧・さやばね」当時の編集に想う

日本鞘翅目学会の和文連絡誌「さやばね」は，第 1 号が 1975 年に高桑正敏・藤田宏両氏の編集により発行された．以後，2 号（1976 年）は藤田さん，3 号（1977 年）は藤田さんと小笠原隆さん，4 号（1978